

谷崎潤一郎の『細雪』

寺 本 智恵 美

目 次

はじめに

第一章 四姉妹の春夏秋冬

第一節 雪子の静かな河の流れ

第二節 妙子を飲み込む大洪水

第三節 鶴子、関西から関東へ

第四節 幸子の涙で流れる物語

第二章 夢の中、蚩狩へ

第一節 夢の世界に誘われて

第二節 夏の夜の余韻の中で

第三章 『細雪』に咲く花

第一節 巡る花の季節の中で

第二節 自然現象に流されて

おわりに

はじめに

『細雪』——それは、私にとって何かしら懐しい響きのある語であつた。その響きから、粉雪が舞い、あたり一面薄く雪化粧してゐるような、穏やかで美しい情景が浮かんでくる。また、純白な雪によつて周囲のあらゆるものが清められていくような錯覚さえも起こる。しかし、実際の『細雪』は、(〇)細やかに降る雪によつて「美」が見え隠れし、その背後に潜む「醜」が姿を現わすように、(〇)美しい中にもどこか幽鬼めいた醜いイメージが漂つてゐるような、神秘的な世界であつた。この神秘的なものに、私は強く心を惹かれたのである。

この物語は、鶴子、幸子、雪子、妙子の四姉妹の日常生活を中心に繰り広げられてゐるわけだが、雪子の度重なる見合い、妙子の自由奔放な恋愛事件、そしてそれらをうまくまとめようとする幸子の苦勞とがその主要部分を成している。

殊に私は、対照的に描かれてゐる雪子の静と妙子の動に興味を持つた。服装や持ち物なども、(〇)一番日本趣味なのが雪子、一番西洋趣味なのが妙子：(〇)というように対照的であるが、性格やその人柄

から受ける第一印象に至るまで何もかもが、四姉妹の中で最も対照的に描かれている。大人しくて、全体的に動きの少ない雪子を静と考へれば、逆に、活動的で、いつも何かを巻き起こす妙子は動になる。その静と動とが交互に組み合わされ、物語の縦糸を成していると考えると、様々な事件の合間に行なわれる、花見・螢狩・月見などの「古典趣味的享楽」が横糸になるだろう。縦糸と横糸とは錦絵のごとく歴史感覚を持たない美しい情景を織り成すのである。

しかし、この『細雪』は単に美しいだけの物語ではない。先にも述べたように、美しい中にもどこか幽鬼めいた醜いイメージが漂っている。自然現象に目を向けると、水害や台風などの、身に迫るような天災がある。これらは『細雪』において、「美」に対する「醜」として描かれ、何事も「綺麗事では済まない」ことを示す重要な役目を果たしている。

以下、この対照的な雪子と妙子の性格を踏まえながら、四姉妹の性格を分析してみたい。そして、その背景に流れている季節に注目し、自然の奏でる情景を通して『細雪』の世界を見ていこうと思う。

第一章 四姉妹の春夏秋冬

第一節 雪子の静かな河の流れ

まず、三女の雪子である。

雪子は、「肉親などへの深い情愛と猷身の徳を持ちながら、物事を自主的に行えない」（『町人文学としての谷崎文学(5)』程、極度に内気で消極的であり、陰気で閉鎖的に見られがちな人であった。

彼女は、あまりの因循姑息さに、日本的な古風な女性という印象を与えるが、実際には仏蘭西語を学んでいたりと、和食より洋食や支那料理を好んだり、その上洋楽に詳しく、自らもピアノを習っている。いかにも上品そうでありながら、足で兎の耳を撮むこともする。また、四姉妹の中で一番華奢な体つきをしている癖に、体は至って丈夫であり、意外にも、病気がちな幸子らの看護をするのは決まって雪子の方である。雪子の内面には、表面からは想像し得ない多くのものがあつたのである。

雪子は、三十歳を過ぎても二十三、四歳にしか見えないような、若さと美しさを保っていた。彼女は、周囲の斡旋で幾度となく見合いをするが、何故か縁遠くて今だに独身であつた。家運が衰えるにつれて、雪子の因循姑息だけが目立つようになつたこと、そして、独身のままで、徒らに年を重ねていくにつれて、生理現象の一種であるしみが目の周りに現れるようになったことなどにより、ますます雪子の縁は遠退いていったのだろう。

しかし、当の本人である雪子はそれを何とも思っていないようだ。たとえ思うところがあつたとしても、自ら意志表示することなど滅多にない彼女の心中は、全く推量の余地がない。一体何を考へているのやら、わけの分からない雪子の態度に、幸子や貞之助（幸子の夫）らは随分気を遣い、腹を立てたり骨を折つたりしたものだつた。

あゝいうふうな引つ込み思案の、電話も満足にようかけんような女性にもまたおのずからなるよさがある。（略）そういう人柄の中にある女らしき、奥床おくゆかしさいうもんを認めてくれる男性もある

やろう：

(下巻、第十七章)

結婚だけは焦って失敗してはいけない、必ず雪子のよさを「認めてくれる男性」が現れるはずだと、長い目でそっと雪子を見守るのは幸子夫婦であった。

そして、何度かの見合いを経て、春は雪子にもようやく巡って来た。彼女は相変わらず黙っているばかりであったが、その人と一緒にいる時には、幸子から見てもこの妹の眼が例になく興奮に輝いている√ように見えたのだった。その人と出逢って初めて雪子の内面が外に出たのである。御牧実という、将来の夫となるべき人の明るさによって、雪子の心が外に導き出されたのであろうか。雪子の暗黙の了解とも取れば取れる態度と、周りの雰囲気の流れされて、自然の成り行くままに、結婚へと話は一挙に進んでいった。この御牧氏こそが、雪子のよさを「認めてくれる男性」だったのである。

考えてみれば、雪子に起こる主な事件といえば、瀬越、野村、沢崎、橋寺、御牧というように、幾度となく執り行なわれる見合いに関するものばかりであった。それも、話が持ち上がった御破算になるということの繰り返しで、決して淀むことのない、緩やかな流れがあるだけであった。

雪子その人を描いた中心の流れは静寂の中に移り行くのだが、彼女の周辺にはさまざまな事件が起る。(略)それだけに一層雪子の存在の静けさが印象づけられるのである。(『細雪』解説)

雪子は、周りで何が起ころうともそれに動じない一筋の流れを持っていた。あまりに大人し過ぎて存在感はなかったが、それでも芯はなかなか強く、黙っていても何でも自分の思い通りにしてしまう

人であった。彼女の静かなその流れに巻き込まれて、何もかもが流されていくような錯覚さえも起こってくる。何はともあれ、雪子は御牧と結婚後、どのように蒔岡家と関係を持ちながら生きてゆくのだろうか、その後の展開に期待して止まない私である。

第二節 妙子を飲み込む大洪水

さて、次はこいさん(末娘)の妙子である。

こいさんである妙子だけは、家運が衰え初めた頃に生まれ育ったこともあり、家名・格式ばかりにとらわれている姉たちとは違う「変わり種」になってしまった。経済的自立を目指して人形製作や洋裁をしたり、家柄・財産にはこだわらずに自由に恋愛をもしている人である。彼女は一目ハイカラな現代娘のように思えるが、その実、趣味は洋裁や日本舞踊であった。だらしない面も多々あったが、生き方・考え方などは姉たちよりも余程しっかりしていて、先駆的な存在として描かれている。容姿からいっても、生き方・考え方などからいっても、一見純日本的で古風に思える雪子とは対照的な存在だったわけである。

妙子は、やがて近代婦人の自由な美しさを発揮してくれると思っ
ている間に、いつしか歪んだ人生を見せてくれるようになった。奥
畑家のぼんぼんと駈落ちしたことから始まり、次から次に荒んだ不
良性のある行為を取り続けている。彼女は、自らを「蒔岡家」の異
端者、即ち良家の不良娘にしてしまったのである。彼女が徐々に廃
退してゆく姿は、朝美しく咲いた花が夕方には醜く萎んでいくよう
なものであった。

常日頃の不良行為の結果は、平素は巧みな化粧法で隠されていたが、いざ病に伏したりすると、△肉体の衰えに乗じて、一種の暗い淫猥とも言えざるような陰翳になって顔や襟頭や手頭などを限取、退廃の姿を見せるのであった。△数年来の無軌道な生活に疲れ切ったという恰好で横わっている妙子は、あの近代娘らしいところが全然なくなつて、△何となく墮落した階級の女の肌▽をも連想させた。表面は美しくても、化粧を落とすと内面の「不健康さ」が露骨に現われ、醜態が剥き出しになるのである。

また、常日頃の不良行為の結果は、妙子を生死の瀬戸際にも立たせる。昭和十三年七月五日、神戸付近に大洪水がもたらされたのである。それは、入梅になってからずっと降り通しの上、折からの豪雨も重なつての大惨事であつた。幸子らは、直接の被害をどうにか免れたものの、運悪く妙子だけは洋裁学院に出掛けていて、この大惨事に巻き込まれたのである。みるみるうちに水嵩が増して、危機一髪のところを、不意に現れた板倉によつて一命を取り留めることが出来たのだ。それは、一步間違えば板倉もろとも水底に沈んでいたかもしれない、という程恐ろしい事件であつた。家族の中で妙子だけがそういう目に遭つたのは、全く不運としか言ひようがないが、私には彼女の不良行為が祟つたせいだといふ気がしてならなかつた。彼女は「良家の不良娘」よろしく、良家の令嬢としては珍しい程起伏に富んだ人生を送つていたのである。

妙子は、偶然口にした鯖寿司が当たつて赤痢になつたり、九死に一生を得るような大洪水に巻き込まれてもいる。板倉と恋愛しても、不幸にも彼を病気で亡くし、三好という男と関係を持ち妊娠しても

逆児であつたその子を死産している。このように、妙子には幸福というものはなかつた。洪水の波が押し寄せてはすべてを飲み込んでしまふように、彼女がそれらを掴む足下からそれらは崩れていつてしまふのだった。

しかし、それでも妙子は、妙子なりに「ゆつたりとした流れの中にすつぽりと納まっている」(『細雪』の世界)のであつた。

第三節 鶴子、関西から関東へ

次は、長女の鶴子である。

物語が主に蘆屋の幸子の家庭で展開したことから、彼女はその中心場面にはほとんど登場して来ないが、様々な事件の合間合間にその存在ぶりを見せている。

鶴子は、下の妹たちがようやく成人する頃には、既に銀行員の辰雄を養子婿に迎え、蒔岡家を継いでいた。△早くから母のかわりに父や妹たちの面倒を見なければならなかつたり、父の死後は、△傾きかけた家運の挽回に努めなければならなかつたり、その上、六人もの子供を抱えていたりして、四姉妹の中で一番苦勞をした人であつた。

彼女は長女ということもあつて、おおらかでのんびりとはしてゐたものの、四姉妹の中で△一番旧時代の教育を受けているだけに、昔の箱入娘の純な氣質を、今もそのまま持っているところ▽もあつた。年の割に幼稚で、あまりにも気が長過ぎるのには、妹たちは絶えず氣を揉まされたものである。

また彼女は、何かをし始めると無我夢中で徹底的にやる人でもあ

った。「あたしが涙こぼして話しても誰も相手になつてくれへん、幸子ちゃん、是非聞きに来て欲しい。」と言つていた癖に、いざ幸子が行つてみると幸子には目もくれず、幸子の言葉を上の空で聞き流し、一生懸命に荷物整理をしている場面（上巻、第二十一章）などは、何とも言はず滑稽なものであった。妹たちはこれを「神憑り」だと言つて気を揉みながらも、その滑稽さに、ひとしきり蛆上そじょうに載せてはいい笑ひ種にしたものである。

鶴子一家は、家名・格式にとらわれながら大阪の上本町で暮らしていた。純大阪っ子の鶴子にとつて、△純大阪式の（略）古風な作り△のその家は、△生まれ故郷の根本△であった。△永久に大阪に定住できる△ものと思つていた鶴子であるから、突然東京行きを強いられた時には、まるで故郷を追われでもするかのように感じたものであった。降つて湧いたような辰雄の栄転は、鶴子にとつては思わぬ青天の霹靂へきれきになつたわけである。

しかしながら、どんな所でも住めば都であった。行くまではあれ程東京という地を嫌つていた彼女であったが、空っ風が吹いて、大阪よりも寒いのが玉に瑕きずであつたけれども、埃ほこりが少なくて空気のきれいな東京は結構住み心地が良かったようである。それに、何と言つても、家名・格式にとらわれず下らない見栄を張らずに、自由気ままな生活が出来るようになったことが嬉しかったのであろう。何かにつけて始末に始末をし、衣服など妹たちにお古を回してもらつたりするなど、こちらに移つてからというもの、現実の経済問題を真剣に考えるようになった鶴子である。

「東京へ行つて、すっかり姉ちゃんら人生観が変わつてもたん

こなあ」

幸子らは、姉のあまりの変わり様に驚きながらも、そんな姉に寂しさを覚え、姿を思い浮かべては感傷に耽つていた。

鶴子一家の生き方・考え方は、大阪から東京へ移つたことで木当に変わつてしまつたのだろうか。これを機に人生観が変わつたのならば、気が長くて優しい鶴子の性格までも変わるかもしれない。関東と関西、鶴子と幸子らとの距離が徐々に広がつていくような気がしてならない私である。

第四節 幸子の涙で流れる物語

最後に、次女の幸子である。

次女の幸子は、計理士の貞之助を養子婿に迎えて分家し、一人娘の悦子と兵庫県の蘆屋に住んでいた。そして、本家を煙たがる雪子も、妙子も、いつの間にか自然に一緒に生活するようになっていた。そこで幸子は妹たちが次々と抱え込んで来る問題を親身になつて考えてやつていたのである。

鶴子を除く三姉妹が一緒に生活するこの蘆屋の家が、物語の主たる舞台であつたのだ。いつも幸子は、陽気で派手なイメージを漂わせていたが、感受性が強く、何かにつけて涙を見せるような人であつた。お嬢さんで育てられたせいとか、精神的にも体質的にも、性こころがなく、妹たちからは窘たじなめられたり、娘の悦子とは本気で喧嘩をするような子供こどもっぽさをも持つていた（上巻、第六章）。

△何事によらず感激するとじきに涙が出る彼女△は、いくら涙があつても足りない位の涙を流している。雪子や妙子が今だに「娘ち

「やん」でいるのを不憫がっては涙を流し、妙子の舞を見れば、「こんなにも上達したのか」と感激して泣いたのであった。子供たちが船出の光景を演じているのを見て目頭を熱くしたし、花見に行けば行ったで「逝く春」を惜しんでは感傷的になっていたのである。幸子は、笑う時には思い切り笑いもするが、それ以上に、泣く時には周りの人が不思議に思う位によく泣いたものである。

このように、元来涙脆い幸子には、悲しい位涙をそそるような出来事が沢山あったのだ。そのおかげで幾度となく涙を見せる機会が持てたのは、何とも皮肉なことである。中でも、二人目の子供が惜しくも二カ月で流れた時には、彼女は我を忘れて泣きに泣き、しばらく涙に暮れていたものだった。夜中に突然起き出して泣いたこともあった。昼間でも一人ぼっちになると知らず知らずのうちに涙をこぼしていることもあった。赤ちゃんを抱いた女性を見ると発作的に目を潤ませたのには、貞之助もほとほと手を焼いた。

こうして四姉妹を一人一人見てくると、姿形は似ていても、それぞれに特長があるのが分かる。時には優美であり、時には厳格な自然現象に包まれて、季節と共に流されていく四姉妹の生活には様々な出来事があったのだ。そういう意味では、『細雪』には多くの喜怒哀楽があると言える。しかしながら、この『細雪』の世界は幸子の目を通して見られている物語であるから、彼女の感情がそのまま『細雪』に通じていると考えるのが自然ではなからうか。幸子が泣けば『細雪』が泣き、幸子が笑えば『細雪』が笑うのだ。強がってばかりいて、感情を抑えているような他の三人とは違って、大いに泣いたり笑ったりする幸子の感情によって『細雪』が展開してい

る、と言えるわけである。

幸子は、(谷崎の求めた理想の女性、松子夫人がそのモデルであるからか)一見、美しく明朗で無邪気な人に書かれてあるに過ぎないが、それだけではないはずだ。『細雪』も、表面は美しく飾られているが、その「美」は崩れ易く、深く掘り下げていくと完全に消えてしまう。『細雪』は、美しくも儂い、その名の通りの「細かい雪」のような世界である。

第二章 夢の中、蚩狩へ

第一節 夢の世界に誘われて

幸子、雪子、妙子、悦子の四人が、辰雄の長姉に誘われて岐阜の菅野家に出掛けて行ったのは、昭和十四年の夏のことであった。

田舎は(略)これからが蚩狩の季節である。この辺は別に名所となつてはいるわけではないが(略)闇に飛び交う蚩の景色がずいぶん美しい。(略)きつとあなた方にはお珍しい見物であろう……(下巻、第一章)

浪漫的な幸子らは、抒情的な雰囲気の中に耽つてることが好きだったので、誘われるままに、それを求めて出掛けたのである。そして、到着した夜、(菅野家で用意された)浴衣を着て、いざ蚩狩へと、幸子らは期待に胸を躍らせながら未知の世界へ足を踏み入れる。

しかし、蚩狩といえは、(八楽座で見た朝顔日記の宇治の場面(略)の深雪と駒沢とが屋形船の中でささやきを交す情景)しか知らない幸子らが思い描いていた世界と、実際の世界とは異なってい

た。幸子らは、△友禪の振袖などを着て、野面の夕風に裾や袂をひるがえしながら、団扇であちらこちらと蛍を追うところに風情があるのだとV思い込んでいたのである。「ほんまの蛍狩は絵のようなわけには行かんねんな」と妙子は笑った。期待は外れたものの、初めて本当の蛍狩の世界に足を踏み入れた彼女らの心は期待以上に強く惹き付けられ、充分満足することが出来たようである。

蛍は、上へは舞い上がらずに、川面に添って低く揺曳していた。蛍が出るという小川の辺りに来ても、なかなかそれらしいものが出て来そうな気配も感じられなかったのは、草が長く伸びていたせいだったのだ。

…ちやうどあたりが僅かに残る明るさから刻々と墨一色の暗さに移る微妙な時に、兩岸の叢から蛍がすい／＼と、すゞきと同じような低い弧を描きつゝ真ん中の川に向かって飛ぶのが見えた。

(略)どこまでも／＼、果てしもなく両側から飛び交わすのが見えた。(下巻、第四章)

彼女らは感動を表現する言葉は何も知らなかった。「お花見のような絵画的なものではなくて、冥想的な、…でも言ったらよいのであるうか」と、言葉では言い尽くせない程の素晴らしい感動を、蛍狩は幸子らに与えたのである。まるで、幸子らをそのまま夢の世界へ、と誘い込んでいくような、夏の一日の不思議な情景であったのである。

第二節 夏の夜の余韻の中で

…遠く、遠く、川の一つづつ限り、幾筋とない線を引いて両側から

入り乱れつゝ点滅していた。幽鬼めいた蛍の火は、今にも夢の中にまで尾を曳いているようで、眼をつぶってもありありと見える。… (下巻、第四章)

幸子らは、△言いようもない浪漫的な心地に誘い込まれVていった。それは、まるで△自分の魂があくがれ出して、あの蛍の群れに交つて、水の面を高く低く、揺られて行くようなV妖しい情景であった。

幸子は、いつまでもあの素晴らしい情景に陶醉して、眠ることが出来なかった。目を閉じていても、飛び交う蛍の姿が頭から離れなかったのである。そして、今、自分が寢床の中で目を閉じているこの真夜中でも、あの川のほとりでは、一晚中数限りない蛍たちが、音もなく明滅しながら飛び交っているのだらうか—と思うと、いつまでもうっとりして、夢の中に吸い込まれていくような気分になるのであった。それは、浪漫的な雰囲気を漂わせた、何とも言えない程の情景であり、蛍狩での出来事は、幸子の頭の中であとさきもなく、蛍火のように入り乱れた。そんな夢見心地の幸子は、「自分は夢を見ていたのかしらん」と、閉じた目を開いて確かめた位である。

幸子の言葉に、「蛍狩というものは、後になってからの思い出の方がなつかしい」というのがある。その時の感動よりも、回想する度に込み上げる、新たなる興奮の方がしみじみと感じられるということであろうか。

詩岡家では、「春は花見」「夏は蛍狩」「秋は月見」というような、「古典趣味的享楽」を象徴する行事が行なわれている。その日もとても静かで和やかな一日であった。そして、幾つもの感動と興

奮とを彼女らの心に残しながら、夏の一日は静寂のうちに過ぎていったのである。時間だけは静かに流れていったが、夢の余韻からはなかなか覚めることが出来ずにいた幸子らであった。

それにしても、その翌日には見合いを控えているというのに、一体何を考えているのやら。雪子は夏の夜の余韻の中で微かな厭を搔いて、一人囂気そうに眠っていた。ほんの少しの間でもいいから、現実の世界から遠ざかっていたかったのだらうか。この見合い話は初めからあまり乗り気でない話だったこともあり、雪子は、何も考えなくていい夢の世界で流されていたかったのかもしれない。

しかし、何はともあれ、この蛭狩で四人が、それぞれの胸に強く残る何かを得たことだけは確かなことである。浪漫的な彼女たちにとって、浪漫的なこの蛭狩は絶好の世界だったようだ。静寂のうちに、彼女らの色々な思いを残しながら、夏の一日は過ぎていったのである。

第三章 『細雪』に咲く花

第一節 巡る花の季節の中で

蒔岡家では、春になると京都まで花見に出掛けるという、恒例の行事があった。

「京都の観桜」とは何ともありふれたものであるが、「花は桜」「魚は鯛」「山は富士」という幸子らの意識からすれば、月並ではあっても当然の美意識であったのだ。彼女らは、今年の花見の盛りを過ぎる頃から、早くも来年のことを思っていた。そして、△花の

盛りに巧く行き合わせるかどうか△と、あやしく胸をときめかせては、△昔の人がしたような「月並な」心配△をするのだった。

花見には、仕事や学校のある貞之助と悦子の為に、否応なく土曜日を選ぶ必要があった。土曜の午後から出掛けて、南禅寺で夕食をとり、都、踊を見物し、祇園の夜桜を見てから麩屋町で一泊し、翌日は、嵯峨から嵐山へ行き、中の島で昼食をとり、午後から平安神宮の桜を見てから帰るといふふうに、コースはいつしか定まっていた。

祇園の夜桜といえは、歌にも、「清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき」(与謝野晶子)などと歌われているように素晴らしいものであった。そのように美しい情景が眼前に開ける。幸子らが去年の今頃からずっと待ち焦がれていた春は、そうして明けていったのであった。

彼女らは、毎年同じ場所に足を運んでいたが、いつも初めてそこを訪れるかのように、(実は懐しいはずの)花々を見守っていた。花の方も、いつも彼女たちを快く迎えてくれた。幸子らは、地上に届かんばかりの紅枝垂を見ては感嘆し、夕空の中に広がった紅色の雲を仰ぎ見ては嘆声上げていたのであった。

「あー」…、幸子らは、平安神宮の廻廊を潜り抜ける時にはいつも、不思議な程の胸のときめきを感じないではおれなかった。彼女らがいいつも平安神宮行きを最後にしたのは、△まさに春の日の暮れかゝろうとする、最も名残の惜しまれる黄昏の一時△に、△浴中における最も美しい、最も見事な花△の下をさまようのは、何とも言えず素晴らしいものだったからである。

…この一瞬こそ、二日間の行事の頂点であり、この一瞬の喜びこ

そ、去年の春が暮れて以来一年に亙^{わた}って待ちつゞけていたものである。
(上巻、第十九章)

祇園の夜桜、御室^{みむろ}の厚咲きの八重桜など、いずれの花もそれ相應の感動を与えてくれたが、とりわけ平安神宮の紅枝垂は、興奮を抑え切れんばかりの感動を与えてくれた。幸子らにとっては、これこそ感動の対象であり、春の象徴だったのである。

ここを訪れると、彼女らは旅の疲れをいやされると共に、無性に「逝^ゆく春を詠嘆する心持」に駆られた。殊に、八年を取るにつれて昔の人の花を待ち、花を惜しむ心が(略)わが身に沁^{しみ}みてわかるようになった。幸子には、八散る花を惜しむと共に、妹たちの娘時代を惜しむ心も加わっていた。次次に色褪^あせていく花に一層心を寄せ、「逝^ゆく春」を惜しむようになったのであろう。

花の盛りは幾度となく巡^{めぐ}って来るが、娘盛りは繰^{くり}り返しやって来ないものである。妹たちの盛りは今年限りではなかるるか、いや、来年もまた満開の花の下で、共に「逝^ゆく春」を惜しみたいものだ、とひそかに思う幸子であった。幸子は華やかな情景の中で儂^{おぼ}い望みと哀感を漂^{もよほ}せていた。そして、「それが一抹^{いちまつ}の春愁となった。」(『倚松庵の夢』)やがて春の日が翳^{かげ}りを見せ始める頃には、紅潮した彼女らの頬はいつしか桜色に染まっていたのだ。

彼女らは何度も何度も振り返り、方々の花に心を残しながら京都に別れを告げた。幸子、貞之助夫婦だけがさらにもう一泊することもあったが、恒例の花見は、平安神宮を後にすると同時に幕を閉じた。こうして幸子らの「今年の春」は暮れていき、幸子らの心は、もう「来年の春」へと移^{うつ}っていくのである。

思うに、このように、「逝^ゆく春」を惜しみながら味わう花見というものは、蛸^{たこ}符とは一味違った情趣のある行事である。現実の慌しい生活から解放され、平安情緒豊かな古典の世界へと誘^{よび}われていく、夢幻的であり絵画的な世界であった。幸子らは家に帰^{かえ}ってからも、八いつでも眼をつぶればそれらの木々の花の色、枝の姿を、眼^{まなこ}の裡^{うち}に描^えき得^えるのである。

時が流れていくにつれて、桜樹も幸子らも年を重ねていったが、すっかり絵の中に収^こまった、その年その年の桜樹と幸子らの姿は、永久不変のみずみずしさを保^{たも}っていた。幸子らが毎年お決まりのコースを辿^{たど}るのは、彼女らの春そのものを辿^{たど}ることであった。故に、同じコースを辿^{たど}りながら、「逝^ゆく春」を惜しむのも、大切な行事だったわけである。

先にも述べたが、幸子らの美意識は「月並な」ものであった。千葉俊二氏は、「月並とは、(略)刻々に移^{うつ}ろう時間の中に一定不変な「美の極致」としてわれわれが繰^{くり}り返し還^{かえ}って行く、魂のやすらぐことのできるような「心の故郷」の意であろう。」(『細雪/月並の美字』)と言う。氏は、「清新さがなく、平凡であること。俗っぽく陳腐なこと。」(岩波国語辞典)だという意を深く掘^ほり下^{くだ}げておられる。とすると、彼女らは常に、平凡ではあっても心の底から安らげる境地、即ち「心の故郷」を求めながら生活していることになる。そして、四季折々に織^をり込まれている花見や蛸^{たこ}符などの風物詩が、彼女らにとっての「心の故郷」だと言えるのである。

幸子らは、このように幾度となく巡^{めぐ}る花の季節の中で、生きていく証^{あかし}を立てて、「心の故郷」を探^{たず}ね求めながら生きてきたのであ

た。走馬燈のように繰り返し何度でも巡っては来るが、年々色褪せていく、春という季節の中で生かされてきたのである。

第二節 自然現象に流されて

さて、年を重ねていくにつれて、^{古今集の昔から}、何百首何千首となくある桜の花に関する歌^に、共感の念を抱くようになった幸子であったが、それは何故なのだろうか。

桜の花は、幸子らにとっては、春そのものであった。だから、咲くのを待ち遠しがったり、散るのを惜しんだりして気を揉むことに、この上ない風情を感じるのである。また、桜の花は散るからこそ素晴らしいのだ。一年中咲き続けている花には何の風情も感じることはないのである。気を揉みながら桜の花を眺めることで、春の風情が生まれて来るのだし、それこそ春の楽しみなのだ。故に、春に桜はなくてはならないものであったのだ。咲いては散るものを、生まれては死ぬ人間たちが愛惜する姿は、今も昔も変わらず、誰もが感動せずにはおられないものであったろう。幸子も、例外なくその一人だったに違いない。

そしてまた、幸子には、^八散る花を惜しむと共に、妹たちの娘時代を惜しむ心^ががあったから、妹たちの徒らに年を重ねている姿を見て、次第^にに共感の念を抱かざるを得ない気持ちに駆られたのであろう。

以上のように、「心の故郷」を他に求めていた幸子らであったがもう一つの「心の故郷」として、蘆屋の家があった。彼女らは、長く家を空けて戻って来ると、生き返ったような気持ちになるのだっ

た。それは、長年住み慣れた我が家であるからだけではなく、そこには、ライラックや八重桜、セレンギなどの、四季折々に咲く花々や木が効果的に植えてあったからである。この花々は、幸子らの心を和ませてくれるものだったのだ。蘆屋の家の周りで咲く、草花から桜、桃の木に至る種々の花の便りによって、新しい季節の到来を知る幸子らであった。

「おや、どこかで丁字^{ちょうじ}が匂うてる。(略)あーあ、まだ桜が咲くまでには一と月あるねんなあ、待ち遠やわ。」(上巻、第十七章)

幸子たちには、丁字が咲けば次は桜が咲く、という感覚が、日常生活の中で無意識のうちに備わっていたのだろう。そういう感覚が、いつでも彼女らに新しい季節の到来を知らせてくれたのである。慌しい生活の途中で静かな時を持つと、爽やかな風が頭上を吹き抜けていくのに気が付くように……

『細雪』には、庭先にある八つ手の葉の上に滴^{しずく}が落ちる音を聞いて、雨が降り始めたことを知る場面や、珈琲の匂い具合で季節の変わり目を感じ取る場面があった。乾いた葉の上にパサリと来れば、それは大抵雨の滴であったし、匂いが香ばしく感じられるようになると、「秋やなあ、——」などと感じるのだった。そのように、幸子らの生活はごく自然な形で自然と結び付いていたのである。

「花」と言えば、「美しい」とか、「^{はかな}儂く脆い」などという観念があるが、単にそれだけではない。時と場合によって、人の心を間接的に表現してくれるものもあったのだ。

それは、幸子が^{おうどん}黄疽にかかって寝ていた時のことである。ただでさえあまり調子の良くない彼女は、寝室にいと却って頭を抑えつ

けられるような不快感を味わっていた。

「お母ちゃん、その床の間に活けてあるのん、何の花やのん」：

(略)

「悦子その花気味悪いわ」：(略)

「悦子それ見てたら、その花の中へ吸い込まれそうな氣イするねん」
(上巻、第二十章)

病床には一輪の罌粟の花が飾られていた。それは決して幸子の嫌いな花ではなかったが、一輪だけ生けてあるその花は無気味なものであった。幸子には、ずっと気になりながらも言い当てられないでいたのを、代わりに悦子が答を出してくれた、というわけである。

病に伏している者には、それが百合であろうと、桜であろうと、罌粟の場合とさほど相違なからう。花というものは、それに接する人間の状態ひとつで、快にも不快にも感じられるものであるからだ。

考えてみると、この物語は終始「花」と結び付いている。幸子らの母は、萩の花びらが散り始めた、秋雨が蕭々と降り続く中で息を引き取っているし、水害の時には、藤蓑が妙子の命綱になっている。雪子の見合いの席には、いつも季節の花が添えられていたし、彼女たちが事ある毎に着る着物や帯には、いつも花模様が織り込まれていたのだ。四姉妹の生活は、花の季節の中で、月日の流れと共に過ぎているのである。

故に、この神秘的な『細雪』の世界は、「季節」という名の河の中で、自然現象によって流されるままに流されてゆくのである。

おわりに

以上、四姉妹の性格を分析しながら、作品の中に流れている季節に注目して論じてきた。『細雪』には、自然な形で自然現象が取り込まれていて、四姉妹の生活は、その中で営まれ、季節によって推移していた。雪子の静かな流れがあったし、目に余るような妙子の事件があった。そして、それらをリードしている幸子がいたし、陰から時折顔を覗かせる鶴子がいた。さらに、「古典趣味的享楽」を求める四姉妹の行なう、四季折々の象徴的な行事があった。そのように、巡る季節の中で流される、自然現象と四姉妹との生活は、いつの時も結び付いているのである。

そして、自然の美しさはそのまま『細雪』の美しさに通じているし、その醜さもまた同様であった。蚩符の余韻で、しばらく陶醉した状態であったり、花見の感動からは一年中覚めないでいたり。四姉妹の心を興奮させたり感動させたりした、自然の奏でる美しい情景は、『細雪』の中でいつまでも尾を曳いていたし、自然のもたらす退廃美もまた、『細雪』の中に醜い影を落としていたのである。流産があり死産があり、黄疸、赤痢、下痢症にかかったり、顔にシミが現れたり。美しい花にも必ず散りゆく時がやって来るように、「美」は、やがて「醜」へと化するのだった。このように、何事も綺麗事では済まない。自然界の中で、この『細雪』の世界は「美」と「醜」とを背中合わせに併せ持ちながら、きわどい境目のところに成り立っている世界なのである。

以上が、拙いながらも私が把え得た『細雪』の世界である。四姉

妹と自然との関わりを中心にきて来たのであるが、古典美との関係、モデル問題との関係その他種々の視点からの迫り方も考えられる。この論を手掛かりとして、更に一層の研究ができればと思っている。

— 参考文献 —

- 『細雪』(甲)(乙) 旺文社文庫▽谷崎潤一郎 旺文社(昭44・5)
 『日本現代文学全集44・谷崎潤一郎集(二)』 講談社(昭38・4)
 『現代日本文学大系31・谷崎潤一郎集(二)』 筑摩書房(昭45・11)
 『日本近代文学大系30・谷崎潤一郎集』 角川書店(昭46・7)
 『谷崎潤一郎の文学』 風巻景次郎・吉田精一編 塙書房(昭29・7)
 『谷崎潤一郎の文学—近代の文学8』 橋本芳一郎 桜楓社(昭42・7)
 『谷崎潤一郎の文学』 伊藤整 中央公論社(昭45・7)
 『谷崎潤一郎—近代文学鑑賞講座9』 吉田精一編 角川書店(昭34・10)
 『谷崎潤一郎—鑑賞日本現代文学8』 千葉俊二編 角川書店(昭57・12)
 『伝記・谷崎潤一郎』 野村尚吾 六興出版(昭47・5)
 『谷崎潤一郎研究』△近代文学研究双書▽ 荒正人編 八木書店(昭47・11)
 『倚松庵の夢』 谷崎松子 中央公論社(昭42・7)
 『細雪』回顧 谷崎潤一郎(昭23・11)
 『細雪』の女 折口信夫(昭24・1)『人間』
 『谷崎と『細雪』』 中村真一郎(昭25・5)『文芸』

『細雪』の序

寺田透(昭25・7)『文学会議』

『細雪』の褒貶

山本健吉(昭25・11)『群像』

『細雪』の世界

小田実(昭43・12)『文芸読本』

『町人文学としての谷崎文学(5)』

橋本芳一郎(昭56・10)『国文学』

『谷崎文学の風土／細雪』

大谷晃一(創元社版『関西名作の風土』)

『細雪』について

篠田一士(昭40・11)『展望』

〔評〕

『細雪』を論ずる視点は多岐にわたり、それぞれの視点で先人のすばらしい論考がある。寺本さんはそれら各論を踏えながらも、作品と正面から取り組む姿勢を常に忘れることなく、自分の理解できる自然との関わりを中心にしながら論を進めている。この視点からだと、古典美との関わりに今少し触れて欲しかったのであるが、これは今後の課題と言えそうだ。四苦八苦しながら書き上げた論であり、一応これはこれでまとまりがある。好感のもてる論文である。

(宇野憲治)